
焔の海兵さん奮戦記

むん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焔の海兵さん奮戦記

【Nコード】

N4772Z

【作者名】

むん

【あらすじ】

瞼を開くと、そこは青い海の世界だった。

普通に暮らしていた社会人男性がONE PIECEの世界に憑依転生。

その憑依先は、なぜか鋼錬の焔の錬金術師ロイ・マスタング。なんでどうしてこうなった？ 突っ込みたいことは山ほどあるが、とにかく生きていこうと努力します。ゆっくり更新していくつもりです。

プロローグ（前書き）

こちらはONE PIECE×鋼の錬金術師の二次創作となります。
恥ずかしながら処女作です。
温かく見守っていただければ幸いです。

プロローグ

その日の俺は、仕事を終えて夜遅く駅のホームにいた。

年度末で気合いを入れて山積みになった仕事のために残業が続く日々の一コマだ。

使い過ぎた頭が少し熱っぽく、ふらふらとしている。PCとらめっこで酷使した目の奥がじわりと痛む。肩や背中筋に石か何かが詰まったように重苦しい。

全身が溜まりに溜まった疲労を訴えている。

自分の身体を労ってやりたいが、後一週間くらいは休めない。せめて早く帰って飯食って寝よう。今は自分を騙し騙し働くしかない。でも仕事は落ち着いたら、その時にガッツリと有給を取ろう。自宅であまりしていいし、久しぶりに実家に帰ってみてもいい。

山、森、海、川と日本で揃う自然は揃っているわりに、不便というほど不便でない実家のある田舎町の風景が頭の中に浮かんでくる。ああ、ひさしぶりにアウトドアがやりたい。大自然の中でのんびりと過ごしたくなってきた。

故郷に思いを馳せていると、ふいに冷えた夜風が吹き抜けていった。それが一緒に細かな塵でも運んできたのか、チクンと目に痛みが走る。

唐突な痛みに対して、俺は反射的に目を閉じた。

そして。

目を感じた痛みがようやく治まって瞼を開くと、青い空があった。嘘みたいな本当の話。

一瞬前まで目の前にあった蛍光灯に照らされた駅のホームの風景が消え失せ、南国リゾートの写真もかくやと言わんばかりのコバルトブルーの海と、それよりはいくらか淡い空が視界いっぱいに広が

っていた。

気づけばツンと鼻の奥を突いていた冷気は温く濃い潮の匂いに取って変わり、煌々と白く灯っていた蛍光灯の明かりは燦々と鮮やかに輝く陽光になっている。

(なんだよ、これ。どうなってんだ!?)

今まで生きてきた中で培った常識を大きく逸脱した現象に立ち竦む。

どうにか状況を理解しようとしても、あまりの出来事過ぎて俺の脳ミソは情報を処理しきれなくなる。

やけにデカイ鼓動が耳に付きまとい始めた途端、その早い拍動に合わせて重く鈍い痛みがオーバーヒートしてしまった頭の内側から響き出す。

今まで経験したことの無い激痛に堪えきれずにその場で崩れ落ちてしまう。

身体がピクリとも動かない、声の一つも出ない。

このままじゃ、死ぬ、死んでしまう……!!

「ロイ君!?’」

死を意識したところに耳へ滑り込む悲鳴のような少女の声と、こちらに近づく足音が何人か分。

痛みを堪えて何とか薄く開けた目だけで声と足音の方を向く。

そこには、見たこともない少年少女が3人。

高校生だろうか? 逆光で顔とかはよく見えないが、この大人とも子供とも言えない雰囲気はたぶんそうだろう。3人ともそろってライトブルーのラインが入った白ジャージを着ているところからして運動部部員とかかな。

とにかく人が来てよかった!

必死の思いで震える腕を動かして手近な少年のズボンの端を掴み、助けを求める声を喉の奥から絞り出す。

「たすけ…あたま、われる…っっ」

「頭が痛いのか!？」

問い質してくる声に、こくこくと頷く。

途端に3人の雰囲気が見るみる強張っていくような気がした。急に倒れて頭が痛いとなったら、ただ事ではないであろうことは誰にでも容易に想像がつくことだ。彼らも状況が極めて悪いと気づいたのだろう。

「動かさねえほうがいいだろ、これ」

「そうだな。ヒナ、教官を呼んできてくれ!」

「ええ、待っていて!」

緊張の走った会話と、バタバタ駆けていく音が頭上を横切っていく。

これで助かるかもしれない、と思うと一気に張りつめていた緊張が解けた。

相変わらず頭痛は止まないし、本当に大丈夫かどうかも分からない。けれども、いったん抜けた気は戻らず、するすると体中の力が抜けていった。

「おい、ロイ!」

「ロイ、ロイ、しっかりしろっ」

側に残ってくれている少年たちがしきりに叫ぶようにして呼びかけてくる。

意識を落とすなという、焦っているような、怖がっているような

その呼びかけに申し訳なく思うが、これ以上意識を留め続けることは今の俺には難しかった。

(ごめん、少年たち。あとで意識が戻ったら謝るから……)

そうして俺は、心の中で必死になってくれている彼らに手を合わせながら、大きな力に引き離されるようにして意識を手放した。

(そういえば……こいつらがずっと呼んでるロイツ、誰だ……?)

プロローグ（後書き）

誰だかわかったかもしれませんが、この少年少女三人組は少し後に再び登場します。

第一話（前書き）

12月19日。ちよつと後半の一部を改変。

第一話

次に目を開けると俺はどこかのベッドに寝ていた。妙に硬いそれは、あきらかに普段使っているベッドではない。

どこだよ、ここ。なんだか被せられた毛布や頭を載せている枕も薬臭い気がする。

もしかして、病院、なのだろうか。

「オウ、目エ覚めたか」

ぼんやりと見上げていたやけに高いコンクリ剥き出しの天井を背景に、ひょいっと覗き込んでくる年配の男性が視界に映った。白衣を着ていて、首には聴診器を掛けている。

多分、このおっさんは医者だ。じゃあやっぱり、ここはどこかの病院なのか。

「ここは？」

「医務室だよ」

「どこの？」

「どこって、てめえ、士官学校のだよ」

「……え？」

俺の質問に怪訝そうな顔をしながらも医者は俺の目玉にライトを当てたり脈を図ったりし始める。

普通の病人に対する診察なのでされるがままになる。一通り終わったら、気分はどうだとか、頭は痛くないかとか問診され、少し考えてから問題はなさそうだと答える。

「ん、低酸素症の症状もだいぶ回復しているようだな」

「は…低酸素…？」

「お前なあ、自分の能力で倒れるなんざ、身体張ったジョークかよ」

「……」

「ま、最初は能力者なんか皆そんなもんだ。気にせず制御訓練に励めばいいさ」

カルテに何やら書き込みつつ、ニヤニヤ笑いながら喋る医者に困惑気味の目を向けていると、ぽんぽんと大きな掌が頭のとっぺんに置かれた。

医者はポケットから出した錠剤を幾つか俺に渡し、それを飲み下すの見届けると「安静にしているよ」と言い置いて出ていった。

ボタンとドアが閉まる音がして、一気に室内に静寂が満ちる。

窓から差し込む仄かな月明りだけの中、俺は深く息をついて目を閉じた。

ゆっくりと十数えて瞼を上げてみたが、広がる景色は変わらなかつた。

「やっぱり、夢じゃない…」

どうしたものかと、とりあえず倒れる前の自分の中の記憶をたどる。

すると、なぜか二人分の記憶が浮かび上がってきた。

なんだ…これ。あり得ない出来事に驚いて、慌てて二つの記憶をなぞる。

その作業によって自分のことを思い出していき、ことの異常さにサアツと血の気が引いていくのを感じた。

俺の抱えた二人の人間の記憶。

一つは俺の記憶。ごく普通の日本人男性で、社会に出て数年のサラリーマンである俺自身の二十数年に渡る平々凡々な記憶だ。

そしてもう一つは、この身体の元の持ち主の記憶。15歳になる少年で、今年遠い故郷からはるばる士官学校へ入学した……ロイという少年の記憶。

……敢えてもう一度言おうか、この身体の元の持ち主の名は、ロイ。名前はロイだけだが、あのロイ・マスタングだ。嘘でもなんでもなく、本当にロイ・マスタングだ。

漫画好きな者なら、一度は耳にしたことがあるかもしれない。

日本で有名な漫画『鋼の錬金術師』の主要登場人物の一人といえは分かるだろうか。

出世街道驀進中のエリート軍人にして最凶の焰の錬金術を操る有能な錬金術師。

まさにその人が、この身体の元の持ち主。

驚くのはそれだけじゃなかった。

その彼が存在するのならば、それはおそらく今いるここは鋼の錬金術師の世界と皆思うだろう。

が、このロイの記憶から引き出した情報にはアメストリス、イシユヴァール、錬金術や国軍といった特有の用語が無かった。

代わりにあつた情報は、グランドライン、マリンフォード、悪魔の実や海軍。

どう見ても別の人気漫画『ONE PIECE』の世界の情報と用語だ。

身体はロイ・マスタングだけれど、生きている世界はONE PIECEって突っ込みどころが満載だよ。

一番突っ込みたいのは、異世界の赤の他人の身体を乗っ取ってしまった事実だけでもさ。

(もう何が何やら、ほんと、どうしたらいいんだよ)

頭の中が理解しがたいことばかりでぐるぐるする。再びめまいがしてきたような気がして、目元に手を当てて深くため息を吐く。どうしたらいいと悩むものの、とっくに理性は答えをはじき出してはいる。

これからどうするか、その答えは一つ。
身体の持ち主の代わりにロイとして生きていくというもの。

普通に考えて、俺はロイじゃないんです、実は日本人の一般市民なんです、なんて言っても信じてもらえると思うか？

十中八九頭がおかしくなったと思われる病院送りだろうな。それも檻付きの方のさ。誰でもそうだろうが、俺もそれだけは嫌だ。

檻付き病院を回避したいならば、ロイの記憶を元に以前のロイと同じように生活するしかない。海軍士官学校ロイ候補生として、軍に入るため日夜訓練と勉強に励むのだ。

平和ボケした日本人としては、海賊とか革命軍とか凶悪な奴らの蔓延る危険なこの世界で海兵さんをやるなんてまっぴらごめんだが、だからといって士官学校を止めるといって選択肢はない。

何故かという、ロイはなんと悪魔の実の能力者で士官学校に特別推薦入学している。その上、海兵志望者向けの奨学金なんてものまで取っちゃっている。

つまり何が言いたいかっていうと、退学すると貰った奨学金+違約金みたいなものの返済義務を負うことになるってこと。

それに加えてこれだけの優遇を受けておいて、途中で大きな病気も怪我も何もないのに嫌になつたから辞めますでは、世間体が物凄く悪くなること請け合い。途中放棄して辞めたが最後、莫大な借金背負って世間から白い目で見られて生きていくことになるわけだ。

それも絶対嫌だ、耐えきれないのが小心者の性。だから辞めたくても辞められない。

結局俺の選択肢はロイとして、未来の絶対正義を背負う海兵さんとして生きていくことしか残されていない。

それに、だ。悲しいかな、この先また元の世界に帰れる保証はな

い。帰れたとしてもそれはいつになるのかも予測できない。

本当に現実的に考えれば考えるほど、ここで生きていくために口イをやることしか選べないのだ。

こういう時、元の世界で読んでいたような二次創作主人公はかなり楽観的で勇んで新たな世界の大海原へ飛び出していくものだったが、残念なことにチキンとして定評があつた俺はそんな楽観的になれそうにない。

ロイ・マスタングがベースなんだからここでも強くなれる可能性はあると思う。

でも、海兵になつたが最後、海賊の強い奴にドカンと弾き飛ばされるかプチッと潰されて終わるとか後ろ向きな未来予想図ばかり頭の中に浮かぶんだ。

怖い目に合うくらいなら出世しなくてもいいや、しがない事務職を目指そう。兵站あたりのできる限り後方にいる部署を目指している。

どうにか強敵と殺し合わないで済むように生きたい、デンジャラスすぎる原作と関わり合いになりませんようにと本気で願っている。

夢が無い奴とか言うな。このチキンとか言うな。

……せめて現実的な小心者と言ってくれたら嬉しい。

第一話（後書き）

次回、同期の桜とご対面の予定。

第二話（前書き）

行き当たりばったりで書いてます。

第二話

ロイ・マスタングになってから、はや二日。

俺は医者のおツサンの根城たる医務室で過ごしている。

体調自体は翌日からそう悪くは無かったが、大事を取るってことでそうなった。

絶対安静だったので、ひたすらベッドの上でじっとしているのは結構辛かった。

まあ、面会謝絶でもあつて見舞い客が来なかったから、ゆっくりロイについて記憶から情報を引き出して考えることができたのは悪くなかったがね。

とりあえず記憶を掘り出して、この世界のロイについて得た情報を話していこうか。

ロイは今年15歳の士官学校一年生。

出身は西の海の大きな王国の首都がある島。

家族は父方の叔母のみ。両親は幼い頃に亡くなり、父の妹であった彼女が女手一つでロイを育ててくれたようだ。

それなりに叔母甥で仲良く暮らしていたロイが、規定の入学可能年齢よりも一年早く士官学校に入った理由は、どうも悪魔の実を食ったかららしい。

そう、ロイは前にも言った通りこの歳にして悪魔の実の能力者だ。

喰った実は超人系エアエアの実。こいつによってロイは空気中に

ある物質ならばなんでも意のままに操れるという能力を得ている。

……役に立つかどうか微妙な能力だ。

それにエアエアなんて、ぱっと名前だけ聞いたら自然系で身体を空気に変えられる悪魔の実なんじゃと期待してしまうような名前だよな。

俺も実の名前を知ってすぐはチートを期待したから、その後で超人系という情報を思い出してがっかりしたよ。初期値がすでに最強なんてご都合主義はそうそうないもんなんだな。

そういえば二日前に倒れた原因は、この悪魔の実の能力を無意識に使ったためだと医者が言っていた。知らず知らずのうちに自分の周囲の酸素の濃度を急激に引き下げたせいで、きつめの低酸素症に陥ってしまったのだとか。

倒れる直前に中身が入れ替わった俺としては、それが本当の原因かどうか疑わしいと思う。急に俺が憑りついたから身体が拒絶反応でも起こしたんじゃないか、本当は。

話を戻す。

エアエアの実を食ったロイは地元の街に居づらくなった。幼少期のニコ・ロビンと同じく、周囲の人間から疎外されるようになったんだ。

悪魔の実の能力者は、ことごとく姿形が変えたり不可思議な現象を起こしたりと常軌を逸した力を示す。それらは常人に恐怖や嫌悪を感じさせるには十分すぎるものばかりで、ゆえに迫害を受けやすいんだよ。

食ったのは本当に不慮の事故としか言いようがないことだったが、ロイも能力者という恐ろしい、厭わしい存在として周囲に睨まれ始めた。

唯一の肉親である叔母は以前と変わらず可愛がってくれたのが不幸中の幸いだな。

だが、そんな優しい叔母にも次第に迫害が及び出してしまった。そこに至つてとうとうロイは街を出る決意を固め、海軍の門を叩いた。海賊に対してあまり良い印象が無く、能力者でも安心していられる場所を考えた時、海軍が思い浮かんだらしい。

ロイは島にある駐屯所の本部大佐に海軍に入りたい旨を直訴し、大いに同情してくれた彼から士官学校と奨学金の推薦状を得た。

雑用での採用でなかったのは、海軍が行っている能力者の囲い込み制度のためみたいだ。

ロイの記憶によれば、海軍では上に行けば行くほど、事務や艦隊指揮に関する能力と共に本人の戦闘力の高さが求められる組織なのだとか。だから強くなりそうな人間には積極的に士官教育を叩きこんで上に上げて使いたいと考え、能力者の士官学校における優遇制度を用意したそうだ。入学試験免除とか、飛び級入学とか、金銭面の援助とか、いろいろと。

様々な特殊な力をはなから持っている能力者は、常人よりも強くなる可能性が極めて高い。いわば特大のダイヤモンドの原石だ。磨けば必ず光ること間違い無し。集めて磨かない手はないってことか。おかげでロイも簡単な面接と心理テストを受けただけで、難なく入学を許可されて奨学金も下りた。

そしてこの夏、ロイは寂しがる叔母に見送られ、遠いマリンフォードの士官学校に入学した。

今は入学して約半年ほどらしい。

鬼のような体力作りの訓練や小難しい座学にも、教官や上級生からの強烈な可愛がりにもようやく慣れ始めた頃だ。

ロイは街と同じように避けられ嫌われるようなことがないのをとても喜び、毎日が楽しいと心底思っただけで暮らしていたみたいだな。

ただ、人と関わることには馴れていなくて、いまだに同期たちと少し距離を持ってしているけれども。

俺がロイに入り込んだ日は、初めて出た航海実習の最終日だった。西の海ではあまり船や海と縁がない生活をしていたので、前々から楽しみにしていた実習だったそうだ。

艦上の業務や航海術の講義を受けつつ、ロイは広大で美しい自分がこれから生きていく場所を大いに満喫していた。様々な明るい感情とほんの僅かな不安を胸に秘めながら。

そんな時だったのだ。

ようやく目の前が開けてきた彼を、俺が乗っ取ってしまったのは。

……うん、借金や世間の目が怖いから仕方ない、適当に楽な道選んでおこう、なんて軽く考えていた最初の俺、本当にロイに謝れ。自分の思考が軽薄すぎて、夢や希望を抱えて真剣に生きようとしていたロイに申し訳なさすぎる。

もう、海軍を辞められない。いや、ロイを止められない。

これを知ってもなお自分の勝手に面倒事を避けて楽な方へ流れて生きるなんてできない。

やったら小心者だからでは済まない。本当の最低な糞野郎になっ
てしまう。

怖いし嫌でたまらないけれど、腹を括らなくちゃいけない。

これからはロイとして生きていく。真剣に生きる。代わりに生き切ることロイの未来を奪った罪滅ぼしをする。

それで許されるはずはないだろうが、そう思わなくちゃ罪悪感で胸が押しつぶされてしまいそうだ。

本当にロイ、乗り移っちゃってごめんなさい。

君のこの身体で、俺は生きるよ。

君の好きになった海で、大事に生き切らせてもらおう。

だから、今はこれでわかってくれ。

……やっぱり危険な原作の出来事には首を突っ込まず生きようと思っただけ、それだけは許してくれると嬉しいかな。

「よし、もう大丈夫みたいだな。帰っていいぞ！」
「痛ッ!?!」

ニツカリ笑って思いつきり俺の背中を叩く医者のおっサン。力加減をしていなさそうな一撃に、一瞬息が詰まりかけた。

病み上がりになってことするんだ、おっサン。また体調を崩したらどうするつもりだよ。

二日目の夕方にして、ようやく退院許可が出ましたよ。

症状ももう見られないし、後遺症もなさそう。明日から学業に戻りなっけ。

ようやくロイとしての生活が本格化するのかと思うと少し緊張するが、気を引き締めるにはちょうど良い。

「どうした、顔が強張ってんぞ」

「あ、いえ、何でもありません」

いかん、緊張が表情に出ていたようだ。オッサンが不思議そうに俺の顔を覗き込んでくる。

慌てて何でもなさそうに笑ってみたが、頬の肉が妙に硬い気がした。緊張し強張っただけじゃなくて、普段あまり笑ってなかったのかもしれない。

「そうかあ？　ま、もうちょっとここで待ってるよ、お迎えが来るから」

「へ？」

前みたいにぼんぼん俺の頭を撫でるオッサンを、思わず見上げる。は、お迎え？　誰か俺を迎えに来るのか？？

そんなことしてくれるような親しい人間はいないはずだけれどな……。

「今朝な、てめえの同室の奴が退院させる時は呼んでくれ、心配だし迎えに行くからって、俺に言ってきたんだよ」

「同室の」

「そうだよ、さっき連絡したからもうすぐ来るから」

良い友達持つてんじゃないか、とオッサンはどこか懐かしそうにまぶしそうに目を細めている。自分の青春時代でも思い出して、微笑ましく思っているのだろうか。

そんなオッサンの様子を他所に、俺はぼんやり記憶を引っ掻き回す。

寮の同室の奴って誰だっけ？　どんな奴だっけ？？

んー、同室の奴は二人いるみたいだな。顔だけぼんやり浮かんできたわ。

変だな、こいつらどっちも日本にいた時どっかで見たような気が

する。

あ、あとこいつらの名前はなんだったかな。えっと、確か……

ふいに、コンコンと軽やかにドアを打つ音が病室に響き渡る。

同室の二人の名前を記憶から掬い上げたのは、ノックとほぼ同時だった。

ちょっと待て、この名前って、本当なのか。俺の同室二人って、まさか。

「先生、ドレークです。ロイを迎えに参りました」

「オウ、開いてるから入りな」

「失礼いたします！」

ドアの向こうから聞き覚えのある声があった。

これは、倒れる前に聞いた少年の声だ。

オッサンの許可とともに、カチャリと丸みを帯びたドアノブが回って、銜色をした重そうなドアが開く。

開け放たれたドア向こうから、現れた人間は三人。

スカイブルーのライン入りの白ジャージに、「MARINE」の文字の付いた同じ配色のキャップを被る彼らは、倒れた時に見たあの三人組だ。

あの時は逆光なんかでよく見えていなかった三人の顔が、今はしつかり見える。

まさかとは思っていたが、三人ともさつき掘り出したロイの記憶と、俺の原作の記憶の中にかつちりぴったり当て嵌まる奴らだった。

「早かったじゃねえか。お、スモーカーとヒナも一緒か」

うん、もう、なんて言っているのかな。

赤旗と白猫と黒檻って、豪勢な同期の桜なこと!!!

第二話（後書き）

原作と真ん中な三人と同期でしたとき。

スモーカーとヒナの二人とX・ドレークが同期なのはオリジナル設定です。

書いといてなんですが、ロイの中の人がコロコロ意見翻していて最低かもしれない。

第三話（前書き）

本作のロイの名前について。

色々ご意見いただき考えました結果、姓はなしで『ロイ』とだけにしておこうと思います。

第三話

【Side:ロイ】

俺の容姿についてだが、ロイ・マスタングそのまんまだ。

黒髪に切れ長で一重の黒目、肌は白というよりは象牙色という、東洋系の特徴を押さえた風貌をしている。

目鼻立ちは整っているが、かなりの童顔でもある。童顔が多いと言われる日本人の目で見ても、絶対に16歳よりも下では、と思うほどだ。

おまけに背が低い。背の順で並んだら一番前、座学の教室でも最前列といった具合だ。この低身長が童顔に拍車を掛けて年齢詐称に貢献している気がする。

急に自分の容姿について言い出して、どうしたんだって？

別に自慢しているわけじゃないさ。まあ昔よりは涼やかな見た目だし、ちよつと嬉しかったけど。

それは置いといてだな。

この容姿のどこが問題なのかはな。

「じゃあコーヒー3つと、ロイはココアでいいな？」

周りからやたらと子供扱いされることなんだ。

メニューを示すドレークが、俺に訊いてくる。

お前って原作では出る度仏頂面ばかりだったくせに、今の時点は爽やかな笑顔を浮かべていることが多いのな。

若々しいし、しっかりしすぎな顎にも、すでに綺麗に割れて六つの腹にも？の印が入っていないから、ちょっと前まで本当にこいつが？・ドレークなのかと疑ったものだ。

将来海軍を辞める時に、相当酷い目にでも遭って荒んだからあんなったのだろうか？

「…コーヒーくらい飲めるが」

「おい、背伸びしてんじゃねえぞ。せめてカフェ・オレくらいにしとけ」

俺の主張に困った顔をするドレークの横から、面倒くさそうにスモーカーが睨んでくる。

原作よりも10歳以上若いくせして、こいつだけはあんまり漫画で見たのと変わらない。不機嫌そうな面に、ゴツイ図体、あと煙草。今みたいな妙に気を回してくれるところもそのまんま。ズボンがアイス喰っちゃまったってぶつかってきた女の子に怒らずアイス代やるエピソードに繋がる、子供向けの優しさだな。

やっぱり俺を子供扱いしてんのか、この野郎。

「あのな、私はもう16なんだ。子供扱いしないでくれ！」

「あ？」

「16歳？」

「えっ、ロイ君って16歳なの？ わたくしより年上なの？」

目を丸くして固まる二人。俺の横ではヒナが、驚愕よ、ヒナ驚愕！と騒いでいる。

あのクールビューティーなアラサー女将校様、学生時代はこんなにまさに女子高生な性格をしていたんだな。今も基本は優等生で冷

静だけれど、オフになるとこんな風になっている時もある。

オンオフを使い分けているのかもしれない。そういや雇絵のスピ
ンオフでそんな一端が見えていたような、いなかったような。

「なんなら学生証で確認するか？」

「……」

「あら、本当にそうなのね……」

「……すまん」

「お前ら…私がいくつに見えていたんだ」

「12、3くらいかと思っていた」

「わたくしもそうだとばかり」

「おれもだ」

ちよつとこの人たち酷くないですか？

本日は待ちに待った休日。

たまには遊ぶぞつてことで、例の赤旗・白猫・黒檻、いや、将来
にはそう呼ばれる予定の3人とマリンフォードの繁華街に繰り出し
てお茶している。

あの日から、もうそろそろ1年が経つ。

ロイになつてぶつ倒れて、彼らに出会って助けてもらつて、そし
て士官学校の苛烈な日々と人間関係にヒイヒイ言っていたら、いつ
の間にか1年が過ぎていた。

その濃厚な1年を過ごす内に、俺は3人とこんな風によく行動を
共にするようになった。まあ、友達になった、と言っているのかも
しれない。

え、原作になるべく関わらないようにしようって言ってなかった

かつて？

予定は未定なんだよ。世の中なんかどう転ぶかわからないことだらけなんだよ。

そもそもな、ドレークとスモーカーは俺の寮での同室だ。2人と関わらないでいるという選択ができなかったんだよ。やろうと思えばできたけれども、それができるほど俺は孤独を愛せる人間じゃない。

徐々に普通に日本での学生時代の友人と接していたようにしていたら、自然と親しくなっていた。

ヒナに関しても似たような経緯で仲良くなった。彼女も悪魔の実の能力者だったので、特別修練と一緒に受けていた。

修練を受けているのは俺たちの学年では俺とヒナだけで、もう友達になつとけと言わんばかりの環境だった。それに元から周りよりは若干ロイも彼女に心を開いていたし、難なくよく話せるようになっていった。

そうやっていって今でこそ普通の友人付き合いして気楽に話しているが、最初の頃は3人とも3様の変わった反応を見せてくれたものだ。

ドレークに座学でわからなかったところを訊ねてみたら、なんだか「クアララが立った！」みたいな驚きと嬉しさが混ざり合って滲み出す表情を向けられた。

スモーカーの時は上級生に手荒く可愛がられそうだったのを助けてくれたので礼を言ったら、ぎよっとした顔をしてまじまじと見下された。

ヒナは2人と違って特に変わった態度も言動もなかったが、ふと気づけばもの凄く優しく母性を感じさせるような眼差しで俺を見ていた。

3人の様子を見る度に、ロイってどれだけ人付き合いが苦手な奴

だっただと愕然とさせられたよ。

それなりに近い位置にいた3人にここまでさせてしまうくらいだ。怯えるハリネズミみたいに周りを遠ざけようとしてはいるが、周りの人間が心配してしまうような雰囲気を出していたのだろう。

周りから理不尽に迫害されていた過去のことを考えたら仕方ない部分もあるが、かなり面倒くさい奴だっただな……。

まあ、3人と親しくなれたことで、最近はややく他の同期たちとも何の変哲もない付き合いができるようになってきた。

いわゆるボツチを卒業したと実感した時、感動のあまりベッドの中でちよつと泣いたのは秘密だ。

しかしさ、本当にどうしてこうなったのかね。

原作で主人公の一味と根深い因縁を作っていたり、明らかに海軍の闇の部分握ってそうだったりする奴らと仲良しになるなんて思ってもみなかった。

でも、悪くはないな。みんな基本的に良い奴らだ。友達になって後悔はないし、これからもそうであり続けられればいいと思う。

ただね、スモーカーと一緒にルフィたちと直接ガチでやり合うフラグとか、ドレークと一緒に海軍の暗部を掴んで堕ちた海軍将校になるフラグとか、結構危ないフラグが立った気がしないでもないけれどね！

【Side:ドレーク】

ずいぶん肩の力が抜けた、とでも言えばいいのだろうか。

拗ねたように尖らせた口でコーヒを啜るロイを見て思う。

西の海から来たこの友人は士官学校に入学してからしばらく、人と上手く関われないでいた。悪魔の實の能力者であることで、故郷の島では酷い迫害を受けていたせいらしい。

そのため常に周りの人間と距離を取ってしまい、時に相手の反応に怯えるような素振りを見せることもあった。

同室であつた俺やスモーカーにさえその調子だ。そうとう酷い目に遭つてきたのだろう。

ロイが好きで人と距離を取っているわけではないことは、しばらく寝食を共にしてわかつた。寮の部屋で俺に話しかけようか迷っている素振りを見せたり、雑談している奴らの輪に入りたそうにしていたりすることが時折あつたのだ。

だから本人に歩み寄る意思があるならば、と空いた距離を縮めようとした。自己満足かもしれないが、一人寂しそうにしているのをどうにかしてやりたかつた。そうする度にやはり怖いと思われたのか逃げられていたが。

そういえば俺がロイを虐めているのではと勘違いしたヒナが、俺とスモーカーに怒鳴り込んできたのも確かこの時だ。能力者同士であり二人でいることが多かつた彼女もロイを気にかけていたので、もしそうならばと我慢ならず行動したらしい。

逃げていたロイの方も、俺たちの行動に何か感じるものがあつたようだ。

半年ほど過ぎた頃から、徐々に自分からこちらへ歩み寄ろうとし始めた。

同じ頃に航海実習の時に倒れた彼を助けたことが転機だったのかもしれない。初めてロイの方から出た言葉は、そのことに関する礼だった。

それからゆつくりと、恐る恐るといったふうにロイは俺たちと会話を交わすようになり、こうして休日に遊びに出るくらいに親しく

なった。

最近では他の同期たちともこれもまたゆつくりと溶け込んでいつている。以前のように寂しそうな顔をすることもなくなった。

良い傾向だと思う。これから同じ旗の下で正義のために戦うんだ。同期として、戦友として仲良くありたいものだ。

「そういえば、それは何なのかしら？」

「これか？」

「ええ、珍しくロイ君が武具用品店なんて行くだもの。何を取り寄せたのかしら」

ケーキを突いていたヒナが、思い出したかのようにロイの足元にある紙袋を指して言った。

ロイが持ち上げてみせると、興味津々といった体で彼女は頷く。薄茶の袋には、さきほどロイの希望で寄った武具用品店のロゴが描かれている。確かご注文の品、とか店員が言ってロイに渡していた木箱が入っているはずだ。

士官学校生でも、学校の貸し出し品ではなくて自前の武器を用意する者は多い。特に刀や銃器関係をメインに扱う者、または珍しい武器を使う者ほどその傾向にあり、ちよくちよく武具用品店に通っているものだ。

だがロイはそうした武器を使っただけではいかなかったと思う。訓練だつて、剣術や槍術、銃火器の訓練ではなく、六式とナイフを用いた接近戦用格闘術の訓練に重点を置いているようだった。

専用のギミックでも仕込んだナイフでも買ったのだろうか？

「開けてみるか」

「良いの？」

ちよつと考えた後、ロイは袋から木箱を取り出してヒナに渡した。受け取ったヒナは、そつと箱の蓋を外す。

カコ、と木が擦れ合う小さな音を立てて開いた蓋の下には、白い手袋が一揃い納まっていた。

武具用品店で手袋？ どういうことだろうか。ヒナもスモーカーも、俺と同じように妙な顔をしている。

触ってもいいと言うので、手に取って検分してみた。手触りは滑らかで織りのきめは非常に細かい。シルクかと思ったが、それにしでは生地には厚みがある。

しかしそれだけだった。表も裏も良く見てみたが、これと言った細工は見当たらない。

仕立ての良い白手袋。そうとしか言いようがない。これが武器とは到底思えなかった。

「ロイ、これは？」

コーヒーを開けたロイと目が合う。

切れ長の目が愉快そうに細められ、薄い唇の端だけがキユ、と上がった。

今まで見せたことがない不敵な笑みを浮かべて、ロイは俺の疑問に答えた。

「発火布の手袋……私の専用武器だよ」

第三話（後書き）

若い3人のイメージ。

ドレークはお人よしの優等生。

スモーカーは雨の日に子犬がいたら拾う不良。

ヒナはいかにも女子高生な委員長。

完全になつ造です。

次回はようやく焔の錬金術発動の予定です。

第四話（前書き）

焰の錬金術、発射します。

第四話

【Side:ロイ】

窓から差し込む爽やかな朝日が差し込む教室には、今俺と能力修練の担当教官だけしかない。

「よく発火布なんて手に入ったねエ〜高かったでしょ」

「ええ、本当に能力者への助成金がなかったら私には買えない額でしたよ」

先日届いたばかりの発火布の手袋を摘み上げているんな角度から眺める教官の中将を前に苦笑を零す。

発火布の手袋は、本当に高かった。この世界に発火布が存在すると知り、ロイならやっぱりこれだよなと気軽に入手を試みて本当に驚かされたよ。

どうも発火布は海楼石並みに希少な繊維らしく、布の状態でも目を見張るような価格で取引されていたんだ。

その辺をまったく知らなかったもんだから、見積書が来た時に提示された金額のゼロが予想より3桁も多くて10回以上読み返してしまったよ。

結局学生課に泣き付いて助成金をもぎ取った上に10年ローン組んでまでして買った。

ニコニコとした笑顔にサングラスを掛けた文字通りに上げるほどの長身の中将は、やっぱりねエ〜と納得したように溜息を吐いた。

「わっしにも事前に相談してくれたら、都合付けてあげたのにイ〜……」

「いえ、そこまでしていただくのは気が引けますよ」

時々ビツクリするような発言を投下してくる人だよな。

都合付けるってなんだよ。武器開発局とかに口を利いて、裏ルートから調達させてあげたのってことか。

それって学生に対して過剰な援助っていうか、他人にバレたら問題にならないのかすごく不安になるよ！

「良いんだよオ〜？ 遠慮なんかしなくてもさア」

「お気持ちだけでうれしいです、ボルサリーノ中将」

あんたに借りとか作りたくないんです、ってのも本音なんですよ。

……もう皆わかったかな。

俺の担当教官、黄猿なんだ。あ、今はまだ中将だからボルサリーノ中将だけだね。

悪魔の实の能力者の士官候補生には、基本的に能力制御のための特別修練が課され、担当教官として能力者の海兵が個別に当てられている。一対一で無意識に能力を出してしまわないようにする制御のやり方とか、どういう風に持っている能力を使っていくかについて相談に乗ってもらったりとかするんだ。

その制度によって俺はボルサリーノ中将に師従することになったんだよ。

初対面の時、内心でなんでだと絶叫しまくってしまった。

だって黄猿だよ？ なんていうか、得体が知れなくて恐ろしい人だと思うのは俺だけかな。

黄猿大将ボルサリーノ。

シャボンディ諸島でドレークたち億超え海賊4人と妻わら一味相手に無双して、戦争編でも海賊たちを青雉と赤犬と見劣りしないくらいにボコッてたから強いことこの上ない。実力のある人だってことは確かだ。

けれども、のらりくらりしていて意図が読みにくく、しつかりと自分の正義を掲げる青雉と赤犬に比べて、その正義がよくわからない。とりあえず軍の命令に忠実だったことはわかるが、そこから先、自分の裁量での正義が不透明な気がする。なんなんだ、「どっちつかずの正義」って。

彼のことは俺の読んでいた辺りまでではわからなくて、それ以降に詳しいことがはつきりする事柄なのかもしれない。

でもそのはつきりする辺りを知らない俺としては、底なし沼みたいに恐ろしい人なんだよ。関わったらどうなるのかが読めなさすぎて怖い。

赤犬が来て今すぐ徹底的な正義に精神を追い詰められるよりは良かったかもしれないが。

とりあえず今の時点では、能力制御なんかの手解きを受けつつ、中將がどういう人なのか探ることにしている。少しでも情報が得られれば、距離を取るかどうかも考えられるしな……。

畜生、なんで青雉が来なかったんだ。ある程度過去話とか考えていることとか明らかになっっている彼なら、こんなに頭使って対応しなくてもよかったのにさ。

世の中ってうまくいかないのな……。

「まゝ必要なものも揃ったようだし、今日は試し撃ちしてみようかア？」

「はい！」

俺に手袋を返しながら、中将が外を指さす。窓の外には、ただ広いグラウンド、この士官学校の訓練場が広がっている。

発火布の手袋が手に入り次第、考えていた技の一つを試すと予定していたのだ。

そう、焰の錬金術の再現技をね。

さて、ここで一つ俺の能力について少しその詳細を語ってみようと思う。

俺が食った悪魔の実、エアエアの実。

超人系に属する実で、その力は大ざっぱに言って空気中の物質を意のままに操ることができる。

ただし、何でもかんでも、どんなふうにも、ではない。

訓練していく中でわかったことだけれども、俺の能力には制約がいくつか存在したんだ。

まず、能力で干渉できる物質に関する制約。

俺は地表面上の大気を構成する成分の物質しか操れない。

どうも空気⇨大気という定義らしい。酸素や水素は問題なく弄れたのだけれど、煙草の煙の成分や撒かれた毒ガスの成分には全く干渉できなかった。

よって俺が使える物は、大気の基本成分である窒素、酸素、二酸化炭素、アルゴン、水素、一酸化炭素、ネオン、ヘリウム、メタン、クリプトン、オゾン、アンモニア、水蒸気、一酸化二窒素の14種のみ。

そして実戦でこっぴどした気体を使用するなら、ある程度の攻撃力が望めて、かつ敵に気づかれにくい無色無臭の物の方が望ましい。

となると実質使えるのは、酸素、水素、水蒸気、二酸化炭素、一酸化炭素くらいになってくる。案外少ないもんだな……。

次に操作方法にも制約がある。

まず俺にできる物質の操作とは、具体的に言うところ指定した場所とその範囲の内での指定した物質の濃度調整と分解・合成である。

本当にそれ以外の操作はできない。できるのは、場所と範囲と物質を指定してその中で変化を起こすことだけだ。

合成・分解も操れる物質の制約との絡みか、大気に存在しない物ができてしまう操作はできない。たとえば水蒸気（ H_2O ）を分解して水素と酸素は作れるが、二酸化炭素（ CO_2 ）を分解して酸素と炭素は作れないって具合だ。

もう1つは、同時に操れる物質は2つまでというもの。これについての理由は仕様ですとしか言いようがない。

なぜかはわからないが、2つ以上の物質を操ろうとすると3つめの操作は無効化されてしまうんだよね。

修練を続ければその制限も上限が上がるかもしれないが、それも可能がよくわからない。

うん、お前の能力って最強すぎるから、ある程度縛り付けとくよって感じだな。

そんなに完全なチートが嫌いなのか、ここの神様は。

でも、これだけ縛りがあっても恐ろしいほどの殺傷力を秘めた能力なんだよね。

例えば、酸素や二酸化炭素、一酸化炭素を使った制圧や殲滅。

酸素、二酸化炭素、一酸化炭素は、正常な空気の中では人体に害はない物質だ。だが、その濃度が変わるだけで猛毒に変化する。俺の能力を使えばこれらの濃度を意図的に弄り、低酸素症や酸素中毒、二酸化炭素中毒、一酸化炭素中毒といった中毒症状を対象に引き起こさせ昏倒させることができるんだ。

しかもやるうと思えば濃度調整の匙加減一つで人を殺せてしまう。

こうした中毒は、呼吸器や脳など生命活動に深い関わりを持つ器官へ大ダメージを与えるからだ。

特に一酸化炭素中毒なんかは手遅れになるまで自覚症状がほとんどでないっていう凶悪な仕様。

聞いたことはないかな。毎年冬になるとストーブの不完全燃焼とかで発生した一酸化炭素による死亡事故とか結構起きているんだよ。周囲に一酸化炭素が増えていることに気づかないまま吸い続けて、そのまま意識を刈り取られて逃げられず死んでしまっただってさ。

これを応用すれば、こっそり敵の周りの一酸化炭素の濃度を上げていき、静かに戦闘も起こさず殲滅してしまうなんて芸当も可能だろうな。

……暗殺向きかもしれない。

じっくりゆっくりした攻撃ではなく、対象にすぐ大きなダメージを与えたいならば、それこそ今日試そうとしている焰の錬金術だ。

焰の錬金術の仕組みは、対象物との間の酸素濃度を調節し、宙を舞う可燃性の塵（塵が殆どない場所では水蒸気から引っpegした水素）を導火線に発火布で出した火花を伝わって爆発炎上させるといふもの。

俺の能力なら、錬成陣がなくとも点火源さえ確保すれば再現可能だ。

対象物の周辺の空気に大量の水素を混ぜ込んで爆発力を上げるなんてこともできる。

さらにその辺の酸素と水素が材料だから玉切れはなく連射が可能得られる攻撃力は十分すぎるほどだろう。

白兵戦に有効なのはもちろんだが、戦場に出たらもの凄い戦略兵器になれてしまうぞ、これ。前線に俺が一人投入されるだけで、大砲や火炎放射器十数門分くらいの大火力が唐突に出現するんだ。敵に及ぼす被害もさることながら、戦意をかなり挫けるだろうし、戦局をひっくり返せる可能性すら出てくる。

本当に最強にして最凶の錬金術だつて言われるだけはあるよな。
まあ、雨の日は導火線が湿気っていてうまく確保できず発動がほぼ不能になるが、それは置いておいて。

やっぱりこの焰の錬金術が俺の主力武器になるだろう。

俺がロイだから、という先入観もあることにはある。だが、それだけではなくて戦闘に非常に有効だと思える決め手があるんだ。

それは、大きな攻撃力、派手な効果、発動の容易さ。どれをとってもわかりやすくいい。わかりやすいということは、他者へのアピールになるんだよ。

俺が焰の錬金術を駆使して戦っていたとする。対峙している敵は、よっぽどのがない限り俺が炎使いか何かだと勘違いするだろう。そして、焰の錬金術での攻撃に意識を向けて対策を練ってくればしめたもの、能力を使って他の物質を操って敵を落とすことができる。

つまり卑怯かもしれないが、隠し玉として酸素・二酸化炭素・一酸化炭素での絞め落としを使うんだ。派手な焰の錬金術ならば隠れ蓑に最適だしさ。

そういう方向で中將との話も進んでいる。

こうしたいんですがどうでしょうって相談した時に、君えげつないねって言われたけど気にしないよ。

さあ、そうこうしている間に訓練場に到着。

せっかくだし、はじめては気持ちよくドカンと一発かましてみようか！

【Side：スモーカー】

訓練場のあたりがなんだか騒がしい。

わらわらとどっから集まったのか知らねえが、結構な人だからが
できているのが目に入る。

何があったってんだ、気になりつつも脇を通り過ぎようとした時
ふいに人だかりの中から聞こえてきた単語に足が止まる。

「ロイ……」

「……あの2年生の……」

「……能力使っちゃ……」

「……危ないらしいぞ」

ロイが能力を使う？

それで危ないらしい？

確かにあいつの能力は扱いが難しく、一歩間違うと味方や自分に
まで被害を及ぼす難儀なもんだが。

使う、ということは何かしらの技を発動させるってことだろうか。
効果の出る範囲のでかい技でも使うから、下手によると巻き添えを
食っちゃってことか？

あの变に人を心配させやがるチビのことと聞いてしまったら、妙
に気になってしまった。

仕方なしに様子を見に人だかりの側に寄ると、見慣れたオレンジ
頭とピンク頭が揃っているのを先に見つけてしまった。

「おい、お前ら何してんだ」

「あ、スモーカーか」

「貴方も野次馬に来たの？」

無理矢理人混みを掻き分けてドレークとヒナの下に近づく。野次馬という言葉が少々気に障るが、まあ今の状態を言い表すには的確な表現なので黙っておくことにする。

二人は人だかりの前付近にいた。

「ロイ君が能力を使った技を試すんですって」

ヒナの指差す先に目を向ける。

訓練場の縁のあたりに、ロイとやけにひよろつとじていて馬鹿でかい将校、多分ロイの修練の担当教官だろう、が立っているのが見えた。

今は何か話し合っているようだ。

「どんな技を試すんだろうな？ 訓練場にいる生徒は全員追い出されてしまったんだ」

「見るなら距離を取って見るようにまで言われたのよ」

「……なんだそりゃ」

「すごく危ないんだと。巻き込まれたら死ぬかもしれないらしい」

興味津々といった体で訓練場の中を覗き込んでいるドレークの言葉に眉を顰める。

危ないの程度がおかしくないか。なんだよ、巻き込まれたら死ぬかもしれないって。

ロイの方を見るが、別段普段と変わらないように思う。いったい何が危ないってんだらうか。

話し終わったのか、教官の将校がロイの側から離れて後ろに下がった。どうやら始まるらしい。

教官が十分に離れたのを確認したのか、ロイが前に向き直る。

そうして腕を前方へと突出すようにした。遠目にだが、出された手が白い物で包まれているように見えた。

あれは、こないだの休みにあいつが買った手袋か？ なんとかって特殊な布で作ったとか言ってた……。

ロイの手の先をよく見ようと目を凝らそうとした瞬間、近くで大砲をぶつ放したより酷い、鼓膜を蹂躪するような爆音が響き渡った。同時に視界に強烈な光が叩きつけられ、思わず光から逃れようとして目を瞑る。

悲鳴やらなんやら周りから漏れる声が聞こえた気がしたが、耳が痛くてそれが本当に聞こえたものか分からなかった。

冬場に似合わない焼けるような爆風が止んだ後、ようやく目を開ける。

土煙が濛々と立ち上り、土くれと焼け焦げた嫌な臭いが漂っている。すこぶる悪い視界が広がる中、何が起きたのか確認しようと必死で見まわす。

ロイの奴はどうした。

何が起きたんだ。

何をあいつは起こしたんだ！

ようやく薄れ始めた土煙の先に、ロイの姿を認める。

ペタリと後ろの方に尻餅をついた形で座り込み、遠目にも蒼いとわかる顔でさつきと同じ方向を凝視していた。

後ろにいた教官の方に目をやると、こちらと同じ方に顔を向けていた。

「あ……」

少し耳鳴りが治まってきた耳に、息を飲むドレークの声が聞こえた。

ドレークもロイの視線の先を見ている。何があるのだろうか。そ

の視線を辿っていく。

そして、言葉を失ってしまう。

「なんだ…これ」

数秒前まで広がっていた訓練場の風景が、大きく変わっていた。

どこまでも均等に均されていたグラウンドのど真ん中に、突如巨大なクレーターが出現していた。

第四話（後書き）

ロイは力加減を間違えたもよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4772z/>

焔の海兵さん奮戦記

2011年12月28日06時52分発行